

保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第4報

——平成24年度の大型紙芝居制作・発表を中心に——

高杉志緒

The Fourth Action-Training Report on “*Shokuiku*”
Centered on the Production and Presentation of
“Large Scale Picture-Story Shows” (Fiscal Year 2012)
at the Department of Early Childhood Education and Care Seminar

by
Shio Takasugi

要旨

本稿は、平成24(2012)年度における保育学科ゼミナール授業活動(総合学習)に関する教育実践報告である。平成17(2005)年「食育基本法」が制定されて以降、保育の現場でも「食育」の導入が本格的に行われていることに鑑み、平成21(2009)年度から報告者は「食育表現ゼミナール」を担当している。ゼミナール所属学生は「食育」を主題とした表現媒体の制作、すなわち子ども達に分かりやすく食の大切さを伝えることを目的としたカルタ・紙芝居・双六などを制作し、発表してきた。特に平成24年度は、前期に行ったバケツ稲の栽培を生かして、後期の大型紙芝居制作・発表を行うことができた。本活動を通じて「領域「言葉」を土台に「食育」に関する保育学生の資質向上を図る」目的は概ね達成できたと考えられる。今後も、「食育」を主題とした表現活動を主体にした地域交流・実践活動を実践できるゼミナール活動の展開を目標としたい。

キーワード：食育基本法、紙芝居、下関ぶちうま食育プラン、山口県阿東町、コメ、
アクティブ・ラーニング、領域「言葉」

Summary:

This paper is an educational action-training report on teaching activities (integrated studies) conducted during fiscal year 2012. Ever since the enactment of the “*Basic Law of Shokuiku*” in 2005, “*Shokuiku*” or food and nutrition

education has been introduced in Japan on a full scale even in the field of *Early Child Education and Care*. In view of this, I have been placed in charge of the “*Shokuiku Expressive Seminar*” since fiscal year 2009. Composed mainly of students who wish to make a career out of *Early Childhood Education and Care*, presentations have been made of our production of *Karuta* or traditional Japanese playing cards, pictures story shows and *Sugoroku*, a Japanese variety of the game of Parcheesi, all for the purpose of conveying the concept of “*shokuiku*” more understandably to children. As a special notation for fiscal year 2012, I would like to say that we were able to complete our production and presentation of “large scale picture story shows” in the latter half of the fiscal year by making good use of growing rice plants in buckets during the first half of the fiscal year. Through the said period of seminar activities, we strove to attain improvements in the quality of *Early Childhood Education and Care* students by placing the groundwork on regional “language” . For the future, I would like to continue to set my goals on the holding of seminar activities, which place their theme on “*shokuiku*” and which are capable of putting regional interchange and action training into practice.

Keyword: Basic Law of *Shokuiku*, picture-story shows, Shimonoseki “Just Tasty”
Shokuiku Plan, Atou Town of Yamaguchi Prefecture, rice, active learning,
regional language.

1 はじめに — 「食育表現ゼミナール」活動と本稿の目的—

平成 17 (2005) 年 6 月「食育基本法」(法律第 63 号) の制定を踏まえ、平成 21 (2009) 年 4 月施行「保育所保育指針」第 5 章「健康及び安全」における「3 食育の推進」の新設、「幼稚園教育要領」第 2 章「健康」における「食育」の位置づけが行われ、現場でも食育推進が行われるようになった。また、下関市は平成 20 (2008) 年 3 月、平成 20 年度から第一次、平成 25 年度から第二次の各 5 年間で計画期間とした食育推進計画「下関ぶちうま食育プラン」が策定され「学校・幼稚園・保育所等における推進」が行われてきた⁽¹⁾。

周知の通り「食育」は保育の 5 領域における総合的展開だけでなく、「養護と教育の一体性の重視」(「平成 27 年度版 食育白書」内閣府) が必要である。また、養成校では、各地域・施設の特性に応じた「食育の視点を含んだ指導計画」が作成できる保育者の育成に対応した授業

実施が問題となっているが、その展開方法は模索中といえる。

以上の状況をふまえ、平成 21 (2009) 年度から発表者は本学保育学科において『食育』に関する『言語表現』活動実践を通じた保育学科学生の資質向上」という目標のもと筆者は、選択希望学生を主体とした「食育表現ゼミナール」(1・2年生合同総合学習、以下「本ゼミ」と略記)を担当している。「食育」「栄養」に関する専門知識・指導については、適宜、本学の栄養健康学科教員に指導を受けて活動を進めている。

主な活動内容は、1. 言語表現媒体・教材と「食育」についての学習、2. 実践的な言語表現能力の向上・実践、以上2点である。過去における本ゼミの活動概要は、平成 21 年度：「山口食育カルタ」制作・実践⁽²⁾、平成 22 (2010) 年度・平成 23 (2011) 年度後期：大型紙芝居制作・発表⁽³⁾、平成 23 年度前期「食育双六」制作・被災地への送付⁽⁴⁾、平成 24 (2012)・25 (2013) 年度：地域の食材研究と大型紙芝居制作・発表、平成 26 (2014) 年度：「食育双六」制作発表、以上である。本稿では以下、平成 24 年度の食育表現を主題とした活動報告を行う。

2 実践報告

本章では最初に保育学科ゼミナール及び本ゼミにおける通年における活動概要を述べた後(2・1)、平成 24 年度前期(2・2)、平成 24 年度後期(2・3)の活動報告を行う。

2・1 実践概要

保育学科ゼミナール(以下「ゼミ」と略記、前期：児童文化Ⅰ・Ⅱ、後期：保育実践演習Ⅰ・Ⅱ)は、学生が所属ゼミを選ぶ希望選択制であり、学生が希望する研究対象を主体として授業を展開する。通年(前期15回、後期15回)で行い、1・2年生合同の活動が前提であること、後期12月の「創作発表会」にて下関市内の施設を借りて地域住民に対して各ゼミの研究発表を行うこと、以上が特徴として挙げられる。各ゼミの所属は各学生の希望に基づいているためゼミ毎、年度毎に所属学生数の差があるが、大きな流れは次の通りである。

- ・前期：所属ゼミナールの希望調査・所属先決定、ゼミ毎に具体的な活動を決定して活動開始
- ・後期：ゼミ毎の活動推進、12月「創作発表会」における研究成果発表、次年度への反省

上記の通り活動内容は各ゼミに任されているため、本ゼミ(「食育表現ゼミナール」)でも所属学生と共に年度毎に決定している。次に報告者が担当する本ゼミについて概要を述べる。

年間を通じて参加したのは平成 24 年度：1年生 5 名・2年生 2 名であった。後期の表現媒体は、所属学生の希望により決定するため、紙芝居制作・発表に携わったのは上記の内、平成 24 年度：1年生 1 名・2年生 2 名であった。それ以外の1年生 4 名は、山口県の郷土料理に関するポスター発表を個別に行った(けんちょう・ちしゃなます・瓦そば・ふく料理)。すなわ

ち平成24年度における本ゼミの活動概要は、

- ・前期（4月～8月）：学生が主体となった食材・食育の研究
- ・後期（9月～2月）：前期に得た研究知見を基にした表現媒体の制作・発表（大型紙芝居・郷土料理に関するポスター発表）

以上2つを中心に通年授業を行った。後期の大型紙芝居発表は平成24年度中2回行った。

- ・12月 保育学科「創作発表会」

（開催場所：地元商業施設内「シーモールホール」、対象者：地域から来場の親子約120名）

- ・2月末 栄養健康学科「食育ゼミナール」主催：親子料理教室「おにぎり作り」⁽⁵⁾

（対象者：下関短期大学付属第二幼稚園 年長組親子約50名）

次に、前期・後期に分けて本ゼミの活動報告を行う。



2・2 平成24年度前期活動報告

平成24年度前期、本ゼミに所属した合計7名（1年生5名・2年生2名）は、ゼミ毎の授業開始後、初回・第2回授業時に下関市が発行した「第1次下関ぶちうま食育プラン」（平成20年）を学習し、食育推進における4分野「1. 食生活の見直し」「2. 食への感謝、食文化の伝承」「3. 家族の団欒」「4. 食の安心・安全、地産地消」の方向性と乳幼児期における「取組のポイント」について学んだ。

次に、具体的な研究活動を決定するためにディスカッションを行ったところ研究主題は「コメ」に決定した。その理由は、「日本の主食で身近なのにどんな風に育つのか説明できない」「ブランド米という言葉聞いたことがあるが具体的には知らないので調べてみたい」という意見に全員が賛同したためである。この2つの意見に基づき、バケツ稲の栽培（2・2・1）、全国におけるブランド米の調査・発表（2・2・2）、以上の研究活動を行った。

2・2・1 平成24年度前期「バケツ稲栽培」について

栽培については、JA全中 全国農業協同組合中央会による冊子⁽⁶⁾やホームページを参考にしただけでなく、バケツ稲の栽培経験がある本学栄養健康学科教員（横家将納准教授）に5月23日に指導を仰ぎ（肥料を入れた土づくり、水やり、種まきの方法）、水稻の種（ホウレイ：普通栽培・早生）も分けて頂いた。翌週5月30日に直径25cm、約12リットル容量3つのバケツを用意して土づくり・種まきを行い、毎週の授業時間を中心に観察記録を行った。

用紙は、JAグループが提供している「バケツ稲づくり観察ノート」（「バケツ稲づくりに役立つ資料」<http://www.ja-kizuna.jp/education/bucket/document/>）を使用した（1、2）。

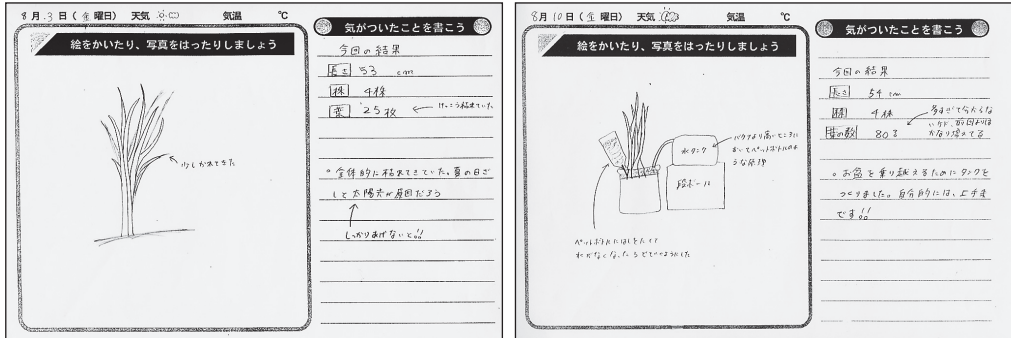


図1 8月3日栽培記録
(高さ53cm、4株、葉25枚)

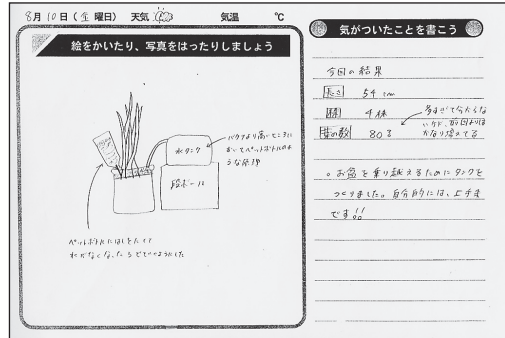


図2 8月10日栽培記録
(高さ54cm、4株、葉80枚)

記録を取る時に、必ず記載して貰ったのは全長（葉の長さ）、株数・葉の数である。夏季休業中に最も水やりが必要となるので、20リットル容量のポリタンクを用意して水が枯れないように工夫した（図2）。但し、夏季休業中にも率先して水やり・観察記録を行った学生は7名中僅か1名であった。夏季休業中の観察の結果、9月3日の午前中、イネの小さな白い花が咲いた様子が観察でき、9月19日、3つのバケツともに落水させた。

後期授業9月20日開始後、9月28日に稲刈りを行った。当初は脱穀し試食する予定で栽培を開始したが、ボウフラ発生防止策として銅イオンを発生させるため10円玉を6月に各バケツに6枚ずつに入れたので、稲藁の保存に変更した。半分は刈り取った状態で束にして乾燥保存し（写真1）、半分は1年生（山口市阿東地福の出身者1名）が、阿東地区で毎年1月14日夜に行われる小正月行事「トイトイ」（平成24年国の重要無形民俗文化財指定）で使われる「藁馬」を作った（写真2）。



写真1 収穫後に乾燥保存した稲藁



写真2 収穫後の稲藁で作った「藁馬」
(幅15cm、高さ18cm)

この栽培を通じた学生達の主な感想は次の通りである。「1粒の種もみから多数の稲ができ

ることを実感できた」「イネが生長するのに水が大切だと実感できた」「(1週間みないと変わるので) 続けて観察することが大切だと分かった」「葉の長さを測り、数を数えることで具体的にいつ、どれ位大きくなるのかが分かった」「イネの花をはじめてみる事ができた」「種まきから収穫・バケツの後片付けまで責任を持って最後まで行うことが大切だと分かった」以上である。

2・2・2 平成24年度前期活動報告 ―全国の「ブランド米」の調査について―

「ブランド米」と呼ばれるコメの研究にあたって、農林水産省が農産物検査法に基づいて指定している水稲うるちもみ・水稲うるち玄米の「産地品種銘柄」をさすことを学生が最初に理解した上で学習を進めた。即ち、「産地品種銘柄」が各都道府県に多数存在していること、品種改良の結果、年度毎に変わっていくことを学生達は学び、「平成24年産 水稲うるちもみ及び水稲うるち玄米の産地品種銘柄一覧」(農林水産省告示第862号)に基づいて調査を行った。

具体的な調査作業としては、全国を9地区(北海道・東北・関東・甲信越・中部・近畿・中国・四国・九州)に分けて、各都道府県の代表的な品種について各地のJA等が編集しているインターネットホームページ、政府・地方自治体による刊行物や白書等を使い各自が調べた。共通の調査事項は①コメの特徴(炊き上がりの食感など)、②名前の由来、③品種の由来、④誕生年(命名年)、⑤その他特記事項の5項目を表にまとめ、7月20日・21日「第4回 みて、つくって、楽しんで」作品展と工作体験(於：シーモール下関専門店街2階ピアモール)、11月11日「桜山祭」(大学祭、於：本学図書館研修室)の2回、ポスター発表を行った(写真3、写真4)。

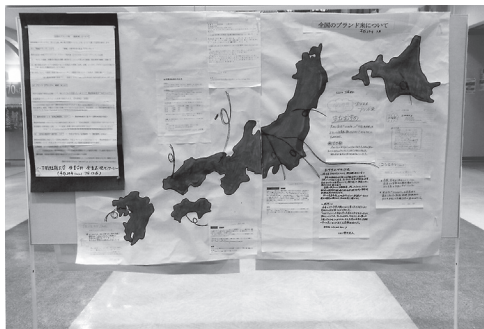


写真3-1 「全国のブランド米」ポスター展示
(7月20～21日)



写真3-2 「全国のブランド米一覧」ポスター
展示 (7月20～21日)

この研究調査を通じた学生の主な感想は次の通りであった。「あらかじめ項目を共通で決めて調べると調べやすく発表するときも分かりやすいことが分かった」「展示した時に全体をみて、表を使うと見やすいだけでなく、(各地域で) 比べやすいことが実感できた」「ブランド米が全国全ての都道府県にあることに驚いた」「耐冷、耐病など地域によって常に品種改良され



写真4 桜山祭における「全国のブランド米」
学内ポスター展示（11月11日）

ていることが分かった」「(山口県を調べて) 県内の都市の中で収穫量が多い市を調べた。1位は予想通り内陸の山口市だったが、海に面した市(2位:下関市、3位萩市)が続いていたことは予想外だった」「お米の名前の由来を調べてみると伝説に基づくもの(例:兵庫県産コシヒカリ「さよひめ」)、土地柄に因むもの(例:北海道のキラキラ輝く雪をイメージさせた「きらら397」)など、様々な思いが込められ、工夫が凝らされていること

が分かった」「(東北地方調査者)魚沼産コシヒカリが食味試験で毎年最高の特Aの評価を得ていることを知り、全国的に有名な理由が分かった」以上である。

2・2・3 平成24年度前期活動小括

平成24年度前期活動を通じて得た学修成果をまとめると次の4つが挙げられる。

- ① <全体活動> 最も身近な主食に対して、実践的な栽培の体験と知識を深める調査研究、双方を同時に行うことができた。
- ② <バケツ稲の栽培> 「育てる」ためには日々配慮し、観察しながら取り組む必要性を学ぶことができた。
- ③ <ブランド米調査> 「ポスター発表」を行うことによって自分自身の知識を深めるだけでなく、地元の方々に対して調査成果を発表できた。
- ④ <発表について> 「ポスター発表」を行うことによって、調査手順について学習しただけでなく調査結果に対して「分かりやすい表現」を工夫することができた。

このように前期活動を通じて学生達は、実践的活動(観察・実践・記録)、調査研究活動(調査研究・実践発表)、双方を体験することができた。特に②については、保育現場においても(子ども・利用者に対する)日々の観察・要点の記録・対応への取り組みは、共通する部分が多いため実践的な教育活動に繋がったといえる。反省点は2点ある。バケツ稲の栽培において当初の予定通り収穫後に脱穀・試食が出来なかったこと、夏季休業中の観察記録については、7名中1年生1名しか自主的に実施しなかったことである。後者については、2年生2名は夏季休業中に保育実習があるため参加が困難であったものの他の1年生(4名)は自主的に栽培を開始しても最後まで責任をもって世話をする意欲・行動力を保てなかったという結果に終わった。但し、僅か1名でも観察記録を行い、生長に触れることができる喜びを味わった姿をゼミ内で共有することによって、自分達が世話をする責任を放棄したことを反省し、粘り強

い取り組みによってしか味わえない達成感・充実感があることを知ることが出来たようであった。

2・3 平成24年度後期活動 ―食育大型紙芝居「きらきらマイ・ドリーム」制作と発表―

平成24年度後期（9月～2月）、本ゼミ所属7名中、学生3名（2年生2名、1年生1名）は、前期に得た研究知見（バケツ稲栽培、ブランド米調査）を基にコメを主題とした表現媒体の制作・発表（大型紙芝居、上演時間約15分間）を行った。以下、制作過程と目的（2・3・1）、あらすじ（2・3・2）の順で報告する。

2・3・1 制作過程と目的について

紙芝居の制作は、①制作および発表目的（子ども達に何を伝えたいか）の決定、②登場人物等の設定・あらすじの決定、③上演における表現方法の決定、④台本作成と紙芝居・ペープサート制作、という順で行った。①の制作・発表目的は「身近な主食に興味を持つ」「コメが収穫されるまでの過程を学ぶ」「命を粗末にせず大切に食べる」という事項を伝えることとした。この3つは、「下関ぶちうま食育プラン」における「1. 食生活の見直し（正しい食の知識を持つ）」、「2. 食材に感謝する」、「4. 地産地消」（阿東地区のコメ）という事項に該当する。

次に、②の登場人物等の設定・あらすじの決定については、1年生が原案を作成した後、担当教員を交えて話し合いを行って作成した。参加学生3名の内、山口県阿東地区（徳佐米の生産地区、標高約300メートルの盆地で寒暖差がありコシヒカリの栽培地区）出身の学生1名は、実家の近隣でコメを栽培している姿に接してきた経験に基づき、阿東地区の米栽培の観察や近隣宅のインタビューを通してあらすじを設定した。

主人公は下関市在住の5歳児女子とし、阿東地区にコメを栽培している祖父宅がある設定にした。なお、主人公名の「まいこ」は米の音読み（マイ）、妖精の名前「キララ」は阿東地区で栽培されている「コシヒカリ」の「ヒカリ」（光）に因んだ名前である。

また、③上演の表現方法については大型紙芝居を主体とし、1）紙芝居の絵だけで場面を説明する、2）背景として使用しペープサートを使用する、以上2つの表現形式を効果的に使用しながら展開することとした。上演時における参加学生3名の役割分担は、ナレーター1名が傍で語り、登場人物2名（主人公「まいこちゃん」1名、コメの妖精「キララ」1名）は、ペープサートを使って紙芝居を背景として登場する形式をとった。

2・3・2 大型紙芝居「きらきらマイ・ドリーム」あらすじについて

ナレーションとペープサートを適宜使用しながら6場面（6枚）の模造紙（78.8 cm×109.1 cm）に絵を描き、物語を展開した。各場面のあらすじは次の通りである。

第1場面（導入：おにぎりとコメについて、紙芝居1枚目：主人公の紹介）

導入では紙芝居をみせない。最初にナレーターが「おにぎり」の絵が描いてあるペープサートを出し、最初に何であるか尋ねる（写真5左：表「おにぎり」のペープサート）。次に、子ども達にとって身近な「おにぎり」が沢山の「お米」からできていることを伝え（写真5右：裏ペープサート「コメ」）、この紙芝居はコメについてのお話であることを伝え、紙芝居を始める。

紙芝居1枚目を提示し（写真6）、大型連休中の5月2日、下関市に住んでいる「山口まいこちゃん」が、阿東地区に住む祖父母宅に来ており田植えを手伝っていること、田植えはお米の「苗」を植える大切な作業であることを伝える。

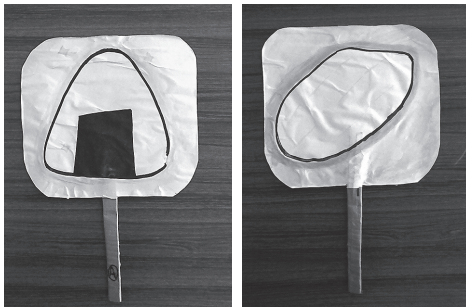


写真5 ペープサート（表：おにぎり、裏：コメ）

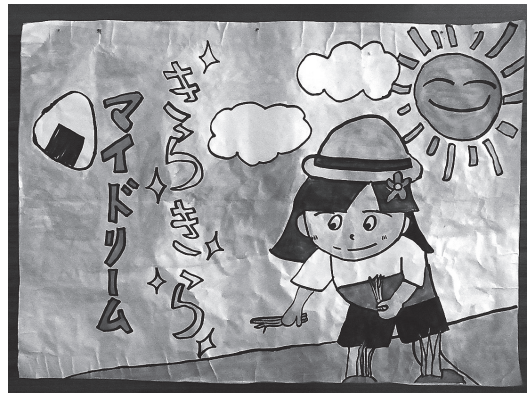


写真6 第1場面（紙芝居1枚目、田植えを手伝う主人公）

第2場面（紙芝居2枚目、祖父母宅で眠るまいこの夢）

田植えのお手伝いで疲れたまいこちゃんは、阿東の祖父母宅で寝ていた（写真7-1）。すると、夢にコシヒカリの妖精、キララが現れる（写真7-2：ペープサート）。キララは、昼間、一生懸命田植えを手伝ってくれたお礼として、まいこちゃんを「お米の世界」に案内する。

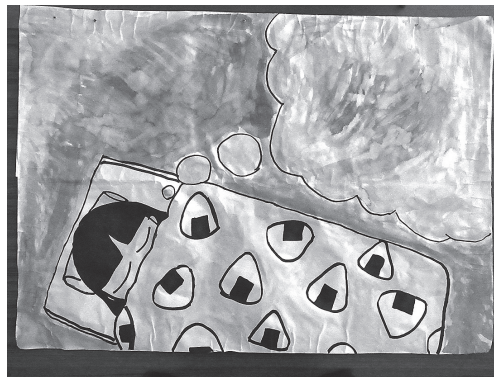


写真7-1 第2場面（紙芝居2枚目、祖父母宅で眠る主人公）



写真7-2 第2場面（紙芝居2枚目、コメの妖精キララ登場）

第3場面（紙芝居3枚目、種もみについて）



写真8 第3場面（紙芝居3枚目、種もみと葉について）

お米の世界に到着したまいこちゃんは、最初にお米の赤ちゃんである「種もみ」に出会う。

白いコメしか見たことがなかったまいこちゃんは茶色の「種もみ」からコメが育つことに驚く。また、「種もみ」から最初に出てくるのは、アサガオやヒマワリのような丸い葉ではなく1枚の長い葉っぱであることを知る（写真8）。

第4場面（紙芝居4枚目、イネの生長5月～8月）

「種もみ」から葉が出ることを知った後、キララとまいこちゃんは、田植えをした後のお米の世界に行く（写真9-1）。5月の「田植え」の時には15cm位だった苗が、6月には30cm、7月に50cm、2ヶ月で約3倍以上も背が高くなる。5～8月のイネの生長の様子は、紙芝居の下部に該当の月がアラビア数字で記してある部分をめぐりながら順に伝える（写真9-2、写真9-3）。

大きく育ったイネは、8月頃に小さく白い花を咲かせるが、朝の僅かな時間しか開花しないことを知る（写真9-4：ペープサート「コメの花」）。



写真9-1 第4場面（紙芝居4枚目、イネの生長）



写真9-2 第4場面（イネの生長、5月の部分をめぐった状態）



写真9-3 第4場面上演風景（7月のイネ、平成24年12月15日）



写真9-4 「コメの花」ペープサート

第5場面（紙芝居5枚目、イネの収穫）

9月になると、イネの花が咲いた部分に実がなり、収穫の時期を迎えることをキララが伝える（写真10-1）。バケツ稲栽培で収穫したイネの穂をナレーターが示し、乾かすと緑の葉が茶色になる様子について、実物を掲げて紹介する（写真10-2）。



写真10-1 第5場面（穂が実ったイネ）



写真10-2 第5場面（前期に収穫したイネの穂を挙げるナレーター）

ようやく収穫の時期を迎えても、スズメがコメを食べにくることがあるため（写真10-3）、メタリックテープを巡らせてスズメをよける（写真10-4、写真10-5）。その他にも台風が来ると葉が倒されたり、おコメの葉や茎を食べる害虫、カメムシにも狙われたりするので（写真10-6：ペープサート「カメムシ」）、コメが無事に育つのは大変であることをまいこちゃんを知る。



写真10-3 第5場面(スズメ<ペープサート表>に襲われるイネ)



写真10-4 第5場面(メタリックテープがあるので逃げるスズメ<ペープサート裏>)



写真10-5 第5場面上演風景(メタリックテープが張られた状態)



写真10-6 「カメムシ」ペープサート(左:表、右:裏)

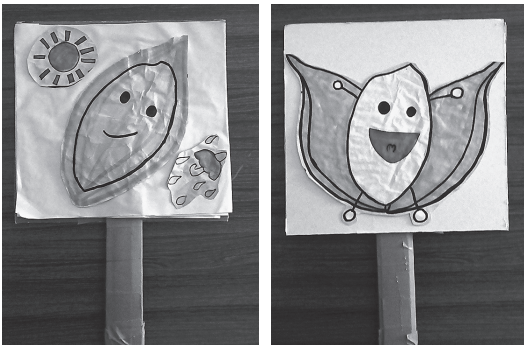


写真10-7 「もみ殻とコメ」ペープサート(左・表:付いた状態、右・裏:はずした状態)

収穫できたコメは、茶色い殻が付いており、まいちゃんが食べている白いおコメと違うので理由をキララに尋ねると「茶色いのは最初に撒いた時の種のように『もみ殻』が付いているため」であり「もみ殻はおコメの中身を守ってくれるもの」(写真10-7左)であること「これを脱いだ状態の白いコメを食べている」(写真10-7右)ことを教えてくれる。

キララは、おコメの世界に戻るためにまいこちゃんと別れるが「おコメを食べる時は、いつも思い出して欲しい」と告げ、まいこちゃんも「毎日食べたら会えるよね? 食べる時はひと粒も残さず大切に食べるよ!」と約束して別れる。

第6場面（紙芝居6枚目、朝を迎えたまいこ、終わりの挨拶）



写真11 第6場面（朝を迎えたまいこ）

翌朝、まいこちゃんは祖母に呼ばれて目が覚めたが、キララの姿はなかった。祖母が、朝御飯は阿東のお米を使ったおにぎりと伝え起きよう促す（写真11）。まいこちゃんはおコメの妖精と出会い、コメやイネの生長について知ることができた。「みんなもご飯やおにぎりを食べる時に、きららのことを思い出してね」とナレーター、出演者が呼び掛ける。全員、紙芝居の前で整列して終わりの挨拶を行って終演。

2・3・3 食育紙芝居劇「きらきらマイ・ドリーム」制作・上演上の工夫点

制作における最初の工夫点は、主人公・場所の設定である。主人公は地元下関市在住で、山口県内に祖父母がいる5歳の女児とすることによって、地元の鑑賞者が物語を身近に感じられるようにした。また、主人公の祖父母が山口県内の阿東町に住むという具体的な場所を設定したことによって、事実に基づく栽培品種・栽培状況を紹介することが可能となった。紙芝居で登場する栽培地の決定は、前期「ブランド米」の研究を行った時に各地でコメの栽培品種が違うことを学生が調査していたため重視した事項であった。

次に、あらすじ・台本を作成する時に配慮したのは、事実に基づいた分かりやすいイネの生長の紹介である。主な工夫の観点は、①用語の使い方・具体的な数値の提示、②ペープサート・実物による視覚的な紹介、③食の感謝への言葉を入れること、以上3点である。

1点目の用語使用の工夫については、コメ：イネの果実からもみを抜き取った穀物・食品、種もみ：イネの果実、イネ：植物、という語意で使用した。また、数値については、実際に阿東地区の農家にインタビューを行い、田植えの時期は5月の大型連休期間中といった栽培時期の確認を行った。また前期に行ったバケツ稲栽培は「ホウレイ」であり阿東地区で栽培される「コシヒカリ」と品種が違うものの学生達の観察記録と農家のインタビューをもとにイネの生長の様子を「2ヶ月で約3倍以上も背が高くなる」（第4場面、写真9-1～9-3）とナレーションが伝え、具体的な数値で紹介した。

2点目の工夫点、即ち視覚的な工夫は、ペープサート・実物による紹介が挙げられる。写実的な紹介とイラストを使って図示を行った。前者は、短時間しか咲かないコメの花を写実的に描いたペープサート（写真9-4）、前期バケツ稲栽培で収穫できた実物のイネ（写真1、写真10-2）の提示によって、鑑賞者に実際の様子が伝わるようにした。後者は、イネの害虫カメ

ムシ（写真10-6左）を示した後、暗い背景の中に目を光らせて戯画化した絵のペープサートに裏返して変化させることによりイネの敵であることを強調させた（写真10-6右）。同時に、もみ殻とコメの説明に使用するペープサート（写真10-7）では、内部のコメに顔を描くことによって、もみ殻がいわば「洋服のコート」の役割をすることを視覚的に捉えられるように工夫した。

3点目の工夫点、食への感謝の表現については、前期で学習した「下関ぶちうま食育プラン」の観点、「2. 食への感謝、食文化の伝承」を考慮に入れた。祖父母が一生懸命育てているコメの田植えを孫のまいこちゃんが手伝う姿を表現することによって「食文化の伝承」を冒頭で伝えることにした（第1場面、写真6）。更に、コメが無事に実り収穫できるためにはスズメ・害虫・台風などへの配慮も必要であることを示すことによって（第5場面、写真10-3～10-6）、日常的に見るコメが食卓にのぼるまで様々な配慮や過程があることを紹介し、「食への感謝」が湧くように工夫した。

上演時の工夫点としては、効果音を付けたことと服装である。効果音については、鉄琴を使った。具体的には場面の移行時即ち、まいこちゃんがお米の世界に移動する時（第2場面～第3場面）・目覚める時（第5場面～第6場面）にグリッサンド奏法で異空間への移動を暗示した。また、イネが生長する第4場面では、生長と共に鉄琴を叩く回数を増やした。具体的には、5月田植え時15cm位の苗：1回、6月には30cm：2回、2ヶ月で約3倍以上も背が高くなる：3回、という叩く回数の増加によって、視覚と共に聴覚でも鑑賞者がイネの生長を理解できるように工夫した。また、服装については、ペープサート・紙芝居に集中できるようにナレーター以外の2名は黒無地の長袖シャツとパンツを着用し、黒子用の頭巾をかぶって演者が見えないように配慮した。

2・3・4 食育紙芝居劇「きらきらマイ・ドリーム」初回上演後の感想・反省と第2回目上演

先述したように上演は2回、ほぼ台本通り約15分間で行った。第25回下関短期大学創作発表会（於：シーモールホール、平成24年12月15日）と「親子おにぎり作り教室」（於：下関短期大学付属第二幼稚園（以下付属幼稚園と略記）、平成25年2月28日）である。初回はシーモールホールという観客が約150名程度収容でき、音響・照明設備を用意した施設における一般市民対象の発表であった（写真9-3、写真10-2、写真10-5）。

第1回目の上演後、12月19日、担当教員を交え、撮影したビデオを鑑賞し、意見交換を行ったところ、以下の意見が得られた。

学んだ点・評価できる点

- ・前期にバケツ稲の栽培を行ったので、実感をもって媒体作成・上演ができた

- ・台本・作画、双方を作る体験ができ、充実していた
- ・（導入の時）子どもがきちんと呼びかけに答えてくれたので嬉しかった
- ・間をあけて、きちんとセリフを言うことができた
- ・（ペープサートの）出し方、動きによって同じものでも印象が変わることを学んだ
- ・コメはありふれたものだと思っていたが、活動を通じて自分たちも大切にしたいと思えた

改善が必要な点

- ・どこに何を置いておくのか、きちんと事前準備をしてから開始すべき
- ・ペープサートの輪郭線をはっきりさせた方がよい。もう少し大きくした方がみえやすい
- ・ペープサートの出し方、タイミングをもう一度確認した方がよい
- ・ペープサート等を持つ高さ、子どもが見やすいように少し上に上げた方がよい
- ・声が小さく、聞き取りにくいところがあった。語尾まできちんと発音すべき
- ・セリフを言わない時の無駄な動きが気になった
- ・紙芝居を1枚ずつ丁寧にめくる必要がある（間違っって複数めくりそうになった）
- ・紙芝居の後方にペープサートや道具を置く作業台を設置していたが、後ろで作業する時も舞台から少し見えていたので、台の上もきちんと整理しておいた方がよい
- ・「わあ、すごい」など驚くセリフを言う時は、もっと大きくペープサートを動かした方がよい

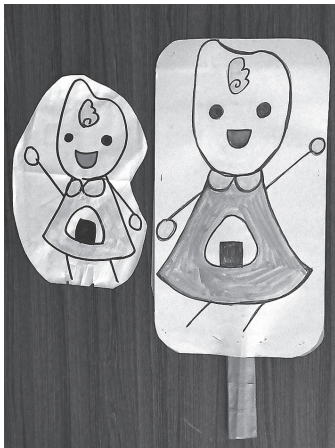


写真 12-1 「キララ」のペープサート表
（左：創作発表会使用・紙面縦 33 cm、
右：改良後・紙面縦 50 cm）



写真 12-2 「キララ」のペープサート裏
（改良後・紙面縦 50 cm）

以上の反省をふまえて、平成 25 年 1 月の授業時にペープサートを大きく作り直し（写真 12-1、写真 12-2）、上演における動作をより大きくするように練習を行った。

また、発表施設・対象者数・対象児の年齢が異なるため、対応が必要であった。

創作発表会では、マイクが使用できるだけでなく、舞台にスポットライトをあてて暗転できるため、場面の切り替えを行う際、照明を効果的に使うことができる。その反面、舞台上には照明

があたりず客席の様子・子どもの表情がみえにくかったため、声だけで理解度を判断しなければならなかった。

2回目の上演は、付属幼稚園年長クラス親子約50名を対象にした親子料理教室「おにぎり作り」において、調理・試食後（おにぎり、豚汁、三色団子、りんご）、遊戯室で発表を行った。発表を行った付属幼稚園の遊戯室舞台は、マイクやスポットライトを使用しない代わりに子どもの表情・反応を近くで見ることが出来ることが事前に想定できた。従って、特に導入部分、ペープサートを示しながら絵を質問する場面では、子ども達の反応をみながら進行するように配慮した。このように2回目の上演では、初回よりペープサートを大きくして見やすくし、マイクがない分、できるだけ大きな声でセリフを伝え、動作を大きく演じた。

また、導入では、おにぎりのペープサートを上げてからナレーターが「これなあんだ？」と質問する予定であったが、ナレーターが質問する前に、子ども達から「あっ、おにぎり」「(自分たちで作って)美味しかった」という声があがったため、「そうだね。おにぎり、美味しかったね!」と予定していた台詞を変えて対応した。このように当日、親子で作った献立の中におにぎりがあったこともあり、最後まで参加者全員が集中して鑑賞した（写真13）。



写真13 親子料理教室の紙芝居上演風景（左：第4場面、右：第5場面、平成25年2月28日）

付属幼稚園での発表終了後、学生は発表について、次のように感想・反省を述べた。

2回目上演発表後の感想

- ・子ども達が真剣にみてくれたこと、その様子を間近でみることができたことが嬉しかった
- ・創作発表会の1回だけでなく、改良して発表できたことで充実感を味わえた
- ・事前の練習を多めにしてリハーサルをきちんと行う必要があることが良く分かった
- ・協力して改良し、一つのものを制作・発表することの大変さ・楽しさを味わえた
- ・同じ作品でも相手（観客）が異なると違うように対応して演じなければならないことが分かった

3 おわりに —感想・反省と今後の活動—

本稿では、平成24年度における食育表現ゼミナールの活動について、後期の大型紙芝居制作・発表を中心に活動報告を行った。本ゼミの目標である『『食育』に関する『言語表現』活動実践を通じた保育学科学生の資質向上』は、平成24年度、概ね達成できたと考えられよう。本ゼミ所属学生は、前期（7名）「ブランド米」調査・バケツ稲栽培を中心に学習を進めることによって「日本人の主食」（コメ種類・栽培）について知見を深め、後期（3名）は紙芝居の制作・発表（2回）という実践を通じて状況に応じた「食育」の表現について学ぶことができた。担当教員の平成24年度学習成果に対する所感は、次の通りである。

学習成果

- ・前期のイネ栽培・「ブランド米」研究を土台とした具体的な表現の探求ができた
- ・物語の作成を通じて新たな疑問（害虫の実態・コメ農家の実情など）を持ち、更にインタビューや調査を進めて発表に活用できた
- ・上演録画DVD鑑賞後、学生から自発的に反省意見を出し、改良に移すことができた。
- ・12月創作発表会、2月親子料理教室、対象者・場所の違いを考慮して発表実践できた

上記の内、3つ目の創作発表会上演録画DVDの鑑賞・反省会は、平成23年度に導入したところ学生の表現力向上に対して大きな役割を果たしたため、平成24年度も継続した。その結果、学生が自発的に反省を行うきっかけとなったと考えられる。「子ども達がみたらどのように感じるのか」という客観的な視点から自分たちの上演を鑑賞することが出来、ペープサートの改良・上演練習に結びつく成果をあげることができた。一連の発表活動を通じて、子どもとのコミュニケーションの可能性を模索し、考察する姿勢がみられたことは重要であろう。

平成24年度活動を踏まえた指導教員の反省点・今後の課題は次の通りである。

指導教員の反省・今後の課題

【学生指導・アクティブラーニングの推進】

- ・同じゼミ内でも学生によって研究に対する温度差があるため、差を埋める援助の推進が必要
- ・（台本通りに発表するだけでなく）発達・状況に応じた媒体活用を行える応用力の育成

【研究対象について】

- ・今回は、主食（コメ）を主題としたが、研究対象の幅を広げる必要がある（例：他の地元農水産物）
- ・総合的・文化史的な視点からも研究を推進する必要がある（例：和食）

【発表媒体研究】

- ・発達・年齢に応じた表現媒体の工夫（平成23年、平成24年度共に5歳児が対象）

以上である。今後も学生の資質向上を目指すと同時に、地域交流にも寄与できるゼミナール活動を展開することを目標としたい。

謝辞

食育ゼミナール活動を行うにあたり御教示頂きました本学教員（栄養健康学科：横家将納准教授・塩田博子教授）、参加した保育学科学生〔平成24年度：2年生（尾関美香・静岡亮太）、1年生5名（山本楓・石澤暁弥・河野愛美・田邊このみ・古畑美月）紙芝居賛助出演1年生1名：山下美佳〕、本稿に対して和文題名・要旨を英訳頂いた David Kalischer 氏（福岡市総合図書館映像資料課勤務）に対し、記して謝意を表します。

本稿は、一般社団法人全国保育士養成協議会主催「全国保育士養成協議会第54回研究大会」（平成27年9月23日、於：ロイトン札幌）における研究発表（ポスター発表、B1-054）「食育表現媒体の作成に関する事例研究—大型紙芝居作成・発表を通じて—」をもとに作成しました。会場でご質問下さいました先生方（順不同）〔木村龍平先生（帝京科学大学 こども学部教授）、進藤容子先生（相愛大学 人間発達学部教授）、新家智子先生（甲子園短期大学 特任専任講師）、若山育代先生（富山大学 人間発達科学部准教授）〕に対し、記して感謝の意を表します。

注

参考文献・論文

- 1) 下関市編集・発行：「下関ぶちうま食育プラン」, pp.46, 2008
下関市編集・発行：「第2次 下関ぶちうま食育プラン」, pp.50, 2013
- 2) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 —「山口食育カルタ」制作を通して—, 下関短期大学紀要, 29, pp.9-26, 2011
- 3) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第3報—大型紙芝居制作・発表を通して—, 下関短期大学紀要, 32, pp.35-54, 2014
- 4) 高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第2報—「食育双六」制作・被災地送付を通して—, 下関短期大学紀要, 30, pp.13-24, 2012
- 5) 塩田博子・芳賀絵美子：付属幼稚園と短大の食育についての連携の試み—3年間の意識変容と事業評価—, 下関短期大学紀要, 28, pp.43-54, 2010
- 6) J A 全中 全国農業協同組合中央会：「体験！稲づくり」, pp.22, 2001

参考 URL

- ・JAグループ「お米づくりに挑戦（やってみよう！バケツ稲づくり）」
<http://www.ja-kizuna.jp/education/bucket/>
- ・農林水産省「農産物検査を行う産地品種銘柄の取扱いについて」
<http://www.maff.go.jp/j/seisan/syoryu/kensa/sentaku/>
- ・山口県食品産業協議会「まるごと！やまぐちネット」
http://www.marugoto-y.net/nousuitiku/nousan/04_tomato.html